Ｙｏｕｔｕｂｅで出会った町に移住 ジオパークと地域交流

浅井　安奈
（男鹿市地域おこし協力隊）

１　なぜ、協力隊に?

現在、協力隊の任期も２年が経過し、いよいよラストイヤーを迎えました。着任前は「地域おこし協力隊」という言葉すら知らない私でしたが、実に運命的なタイミングが重なり現在に至っています。

男鹿市に来る前は東京で働いていて、コロナ禍でリモートワークの毎日でした。そんな時、たまたまＹｏｕｔｕｂｅで見つけた映像に惹き付けられました。その映像こそが、男鹿市の観光ＰＲ動画で、旅行好きの私でもこれまで見たことのない世界観と地形に魅了されてしまいました。これが秋田県の男鹿半島を初めて知った瞬間でした。

（入道崎からみた日本海）

この日をきっかけに、男鹿半島のことが気になってしまい、いろいろと調べているうちに、地域おこし協力隊という存在に出会いました。これが全ての始まりです。ＰＲ動画を見つけてから、協力隊に採用され、男鹿市へ移住することになるまで、わずか半年の出来事でした。

２　ミッションと地域を知る

私の協力隊としての活動ミッションはＳＮＳを活用して男鹿の暮らしや魅力を主に動画で発信することです。動画編集は未経験だったのですが、もともと興味がありやってみたかったことだったので、チャレンジできる機会をいただいたことに感謝しています。

少しでも多くの人に男鹿を知ってもらいたいという気持ちが強かったので、当時まだ始めている協力隊が少なかったＴｉｋＴｏｋでも発信を始めてみました。手探りでのスタートでしたが、動画を見てくれた方から「男鹿ってこんな場所あったんだ。行ってみたい」とか、地元の方からも「新しい発見ができた。ありがとう」など、自分の発信を見た多くの方からリアクションをいただけたことが、励みとなり、今でもやりがいに繋がっています。

私自身がＹｏｕｔｕｂｅを見て男鹿半島にやって来たので、自分がつくった動画でも誰かの新しい道へのきっかけになってくれればいいなと思い、日々取材・発信をしています。

縁もゆかりもないところへ飛び込んできた私は、着任当初、まずは男鹿という場所を知ることから始めました。男鹿市の協力隊ＯＧから、地域の方々を紹介してもらったり、公民館行事

に参加して地域の方々と交流し、男鹿のことを教えてもらいながら、この場では紹介しきれないほどの体験や経験をさせていただきました。なかでも、秋田・男鹿ならではの、ハタハタ寿司やいぶりがっこ漬け作り、男鹿梨の収穫、なまはげ柴灯まつり用の「つまごわらじ」作りはとても貴重な体験でした。

（SNS発信用に撮影）

（つまごわらじ編み作業）

地域に根差す文化や習俗の大切さ。そしてそれを繋いでいくことの難しさ。生きていく上で欠かせない「食」に関しても、農家さんの苦労を知ったり、自然の恵みに感謝することを改めて身に染みて感じることができました。これは男鹿に来ていなかったら、きっと気づけなかったことだったと思います。

情報発信以外にも、首都圏などで開催される移住イベントに参加することもあり、移住希望者に男鹿の紹介や相談対応をする際に、地域の方から聞いたお話や、前述のような自分が体験した内容を直接お伝えできることもやりがいの一つです。

３　ジオパークガイドへの道

私が男鹿に来たきっかけとなったＰＲ映像の大部分では、男鹿半島・大潟ジオパークの景観が紹介されていました。着任１年目も半年を過ぎた頃、ジオパークガイド養成講座というものがあることを知り、元々地理や地形が好きだったこともあって受講してみました。

全８回の講座では、現地研修や座学を通して、ジオパークについて多くのことを学ぶことができました。現地で実際に行う模擬ガイドでは、ガイド場所として、大好きな入道崎の地を選びました。しかし、いざお客様を前にガイドをしてみると、ジオサイトの知識だけでなく、お客様に楽しんでもらえるようなトークのための雑学と時間配分、危険箇所や注意点等の把握といった危機管理能力も必要で、一筋縄ではいかない難しさを感じましたが、楽しんで取り組めました。その甲斐あってか、その後認定試験に無事合格し、ジオパークガイドの資格を取得。現在では協力隊活動の傍ら、ガイドとしても活動しています。

（入道崎での模擬ガイド）

ガイドデビューは、アジサイで有名な雲昌寺のツアーでした。男鹿温泉郷に宿泊していたお客様を早朝にガイドすることになり、宿泊施設から現地までバスでの移動中もガイドをすることになりました。全てが人生初の体験で、とても緊張していたのですが、自分の好きな男鹿のスポットをお客様に教えてあげたいという想いと、旅の思い出として少しでも記憶に残ってもらえたらいいなという想いで、とにかく必死だったのを覚えています。

４　ジオカフェの開催

昨年にはジオパークガイド養成講座を一緒に受講したメンバーと「ジオカフェ」というイベントを企画し、計４回開催しました。

このイベントは、男鹿半島・大潟ジオパークの魅力を再発見し、「地域での繋がりづくりのきっかけになるような場所をつくりたい」という想いからスタートしました。ジオパークのことを知ったり、地域のことを語ったり、男鹿の情報交換ができる場所を目指して、ゲストを招いたり、ワークショップや体験も交えてみるなど、各回の内容も工夫してみました。

（第１回ジオカフェ：ミニガイド）

そのなかで、私が一番印象に残っているのは、第３回のジオカフェで耕作放棄地にそばの種をまき、ジオカフェそば畑が誕生したことでした。

さらに第４回では、その畑から収穫したそば粉を使って、ピザやたこ焼き風のパンケーキを作り試食しました。参加者にもそば畑の成長の様子だけでなく、その美味しさを知ってもらえたことが嬉しかったです。

このそば畑は、地域の方々や地元のおそば屋さんのサポートがなければ、実現できなかったものです。この企画を通して、多くの方と繋がることができ、その方たちのご協力があったからこそ、ジオカフェを成功させることができました。また、私が男鹿に来た理由や協力隊活動について参加者に知ってもらえたことも大きな成果でした。

（第3回ジオカフェ：そばの種まき）

（第4回ジオカフェ：そば粉でピザ作り）

このイベントにあたっては、私は企画・運営のサポートに徹し、チラシ作成やＳＮＳでの情報発信、ゲストとの日程調整、鑑賞用動画の編集などを行いました。サポートにまわった理由は、将来的に私がいなくなっても地域のメンバーだけで自立したイベントになってもらいたい、

そのために背中を押してあげたり、一歩踏み出すきっかけを作ってあげたいと思っていたからです。

嬉しいことにこのジオカフェの活動を、秋田県主催の「あきた元気ムラ大交流会」において事例発表することになり、メンバーの活動をより多くの方に知ってもらえたことが、今後もジオカフェを続けていくためのモチベーションに繋がったかと思いますし、今後のジオカフェがどうなっていくのか私自身楽しみです。

また、ジオカフェをきっかけに、ジオパークやジオガイドの活動を発信するＹｏｕｔｕｂｅチャンネルも開設しました。個人的にもジオパークの魅力をもっとたくさんの方に伝えていきたいです。

５　男鹿のナマハゲ文化にハマる

私は協力隊として、１年目から現在まで、できるだけ地域の方たちと接する場に足を運ぶよう心がけています。公民館行事にも興味があり、取材でもよく訪問させてもらっています。

多くの行事に参加するなかで、一番印象的だったのは、やはり「男鹿のナマハゲ」に関する行事や体験でした。

ナマハゲ行事では当日の大晦日まで、面の修繕や衣装の制作など様々な準備が必要だということを知りませんでした。ナマハゲの衣装や履物は、毎年稲刈り後に稲ワラを調達するところから始まり、衣装を編むのも地域住民が集まって手作業で行います。地域によっては、編み方を知っている人材が年々減少しており、次の世代に伝えていかなければ、その技術も消滅してしまうかもしれないという現実を知りました。そこで、自分も何か役に立ちたいと思い、ナマハゲが履く「つまごわらじ」や衣装となる「ケデ」編みのお手伝いをさせてもらいました。これらを編むのには技術だけでなく力加減も重要で、なかなか難しい作業だったのですが、自分の編んだものを大晦日にナマハゲが身に着けてくれると思うと期待感がどんどん大きくなっていきました。

そして、大晦日当日には家々を回るナマハゲに同行させてもらい、本物のナマハゲ行事を見学させてもらうことができました。年に一度の大晦日のこの行事は、男鹿の人たちにとって古来から大切にされ受け継がれてきた、本当になくしてはならない行事であることを、この夜、改めて実感しました。

（安全寺地区のケデ編み）

（大晦日のナマハゲ行事出発前）

もっとナマハゲについて知りたいと思い、昨年は「ナマハゲ伝導士認定試験」を受験し合格しました。ご当地検定の一種ですが、伝導士になることで、ナマハゲ文化を広めるサポーターとして活動することができ、地域の観光振興にも貢献できる面白い資格です。自分もサポーターとしてできる限り応援していきたいです。

6　協力隊としての経験と今後…

気づけばあっという間で、現在協力隊３年目。男鹿市に引っ越してきたのがつい最近のことのようです。

そのくらい一日一日が濃く、充実していて毎日が本当に生き生きしていると感じます。

他の職業では学べない数多くのことを経験することができたのも協力隊になったおかげです。正直なところ、私は人前で話すことがあまり得意ではありませんでした。しかし、活動を通して地域の方々と関わるなかで、学校での授業や地域イベントなどで、自分が男鹿に来た理由や、これまでの人生についての話をしたり、自分の意見を伝える機会も増えていき、これまで人前で話すのを避けていたはずが、やってみると面白いと思えるようになりました。

また、協力隊の活動は人との出会いが豊富で、いただいた名刺の数が、その多さを物語っています。協力隊の仲間たちにも様々な背景や経験のある方が多く、幅広いジャンルの方と出会えるのも魅力で、自分の世界が広がるのを感じます。そういった人たちとの出会いや経験を通して、自身のコミュニケーション能力や、傾聴力も向上しました。さらに、行政との関わりを通じて、民間企業とは異なる世界での経験を得られたことも大きかったです。

任期後については、具体的にはまだ決まっていないのですが、男鹿との繋がりを大切にし、その繋がりを仕事に結びつけられたらと考えています。協力隊をきっかけに大好きになった男鹿を、今後も多くの方に知ってもらえるよう発信を続けていけたらと思います。

３年目は、任期後の生業について考えながら、さらにまだ知らない男鹿を発見したり、自分ができることで誰かの役に立てたらいいなと思っています。

＜担当者から一言＞

今回寄稿してくれた佐々木隊員と浅井隊員は、移住定住促進を共通のミッションとしていますが、それぞれ違ったアプローチで、都市部からの移住者目線で地域の魅力を発信してくれています。

当たり前だと思っていた日常のコトやモノも、彼女たちとの会話であったり、制作した動画や投稿を通して、実は素晴らしい宝だったんだと気づかされることも少なくありません。

県内の中でも高齢化が進む本市にあって、「男鹿っていいトコだべ！」と胸を張って自慢してくれる住民が増えることは、今後の地域づくりにとっても重要です。そしてこの二人自身も、そのことに気づかせてくれる貴重な人材、地域の宝だと考えています。

二人とも、今年が隊員としての最後の年になりますが、今後も地域と男鹿に住む人々の魅力を引き出してくれることを期待するとともに、彼女たち自身の進路実現のためにもサポートしていきたいと思います。

（男鹿市総務企画部企画政策課
伊藤　大輔）